一般演題 I　消化管・膵（93～99）

93. 各種疾患異常時の血中ガストリンおよび V. B_{12} の臨床的意義

京都大学　放射線科
井村　寿男　　石川　演美　　杉本千鶴子
安達　秀樹　　鳥塚　莞爾
中央放射線部
森　　徹　　浜田　哲

ラジオアイソトープを用いる in vitro 測定法の進歩によりガストリンを初めとする各種消化管ホルモン，内因子，V. B_{12}，抗胃抗体等の測定が試みられる様になり，これらの生理作用，各種疾患異常時における臨床的意義等が徐々に明らかにされつつある．

われわれは各種胃腸疾患者におけるX線検査，内視鏡検査等のルチン検査と共に，安静時および各種刺戟時のこれらの物質の血中濃度の測定，吸収代謝像の観察を行なって，診断および治療に資せんものと考え，まづガストリンおよび V. B_{12} の測定を行なった．

ガストリンの測定には諸家の報告があるが，Mc-Guigan ら，Yalow および Berson の方法に準じた．抗ガストリン抗体は Wilson 社製モルモット血清（1：40,000titer, Lot # 150835）を用いウサギ抗モルモット γ グロブリン血清を第2抗体として二重抗体法で測定した．

V. B_{12} の測定は Mallinkrodt 社製の Phadebas® B_{12} テストキットを用いて行なった．これは内因子を用いた新しい Receptor assay で，BとFの分離には Sephader ゲルを用いて高感度の測定が可能である．

これらの測定成績をX線検査所見，内視鏡所見，胃生検組織所見，小型電極による胃液酸度測定成績等と比較検討し若干の知見を得た．

94. 膵シンチグラムによる膵癌と膵炎の鑑別

千葉大学　放射線科
内山　　暁　　国安　芳夫　　筧　　弘毅
松浦　康彦

われわれはすでに約100例の組織診断の明らかな膵疾患についてそのシンチグラムを解析し，とくに膵癌の特徴を検討しているが，慢性膵炎の症例には組織診断のないものが比較的多く，この集団では膵炎の特徴を正しく把握できていないおそれがあった．そこで臨床的に確定されている慢性膵炎の症例をこれに加え，とくに膵癌との鑑別に重点をおいてシンチグラムの特徴を再検討した．

膵シンチグラム上から膵癌をうたがわせる特徴は，膵影の一部に欠損をみとめること，膵全体の輪郭が不明なほど描出が悪いこと，および膵影が全く描かされないことであり，膵癌の約90％はこのどれかの所見を示す．

一方臨床上確実に膵炎と診断された30例のシンチグラムを解析したところ，20例，67％は正常膵と変らないか，全体に濃度低下のあるだけのシンチグラムであったが，10例，33％に輪郭が不明なほどに描出の悪い場合がみられた．すなわち膵炎の⅓は膵癌との鑑別が困難なシンチグラムを示した．しかし膵炎の中で，膵影の一部欠損という所見を呈するものは少なく，手術時にも膵癌と診断されながら組織学的に炎症性腫瘤であった2例があるのみである．また膵癌の中でこの一部欠損を示すものは約6割にみられる．従ってこの一部欠損という所見だけは膵癌をつよく疑わせるものと考えてよいように思われる．定量的シンチグラムから膵肝摂取比，膵全身摂取比を計算し，各種膵疾患の特徴をしらべる方法も試みているが，この方法では正常膵の平均値に比べて膵炎や膵癌の平均値はたしかに低値を示すが，膵炎と膵癌の間の鑑別はできない．結局，膵シンチグラムは疾患の診断でなく膵が正常か異常かのみを調べる目的に役立ち鑑別診断は出来ないという考え方が多いが，少なくとも限局性の欠損が得られた場合には膵癌を疑いうるというのがわれわれの結論である．

Presented by Medical*Online